

2

- 異才列伝 笹森儀助
- 皇室ダイアリー
- 華すたいる



5

- おやこで英会WA!
- ポケモン 故事成語

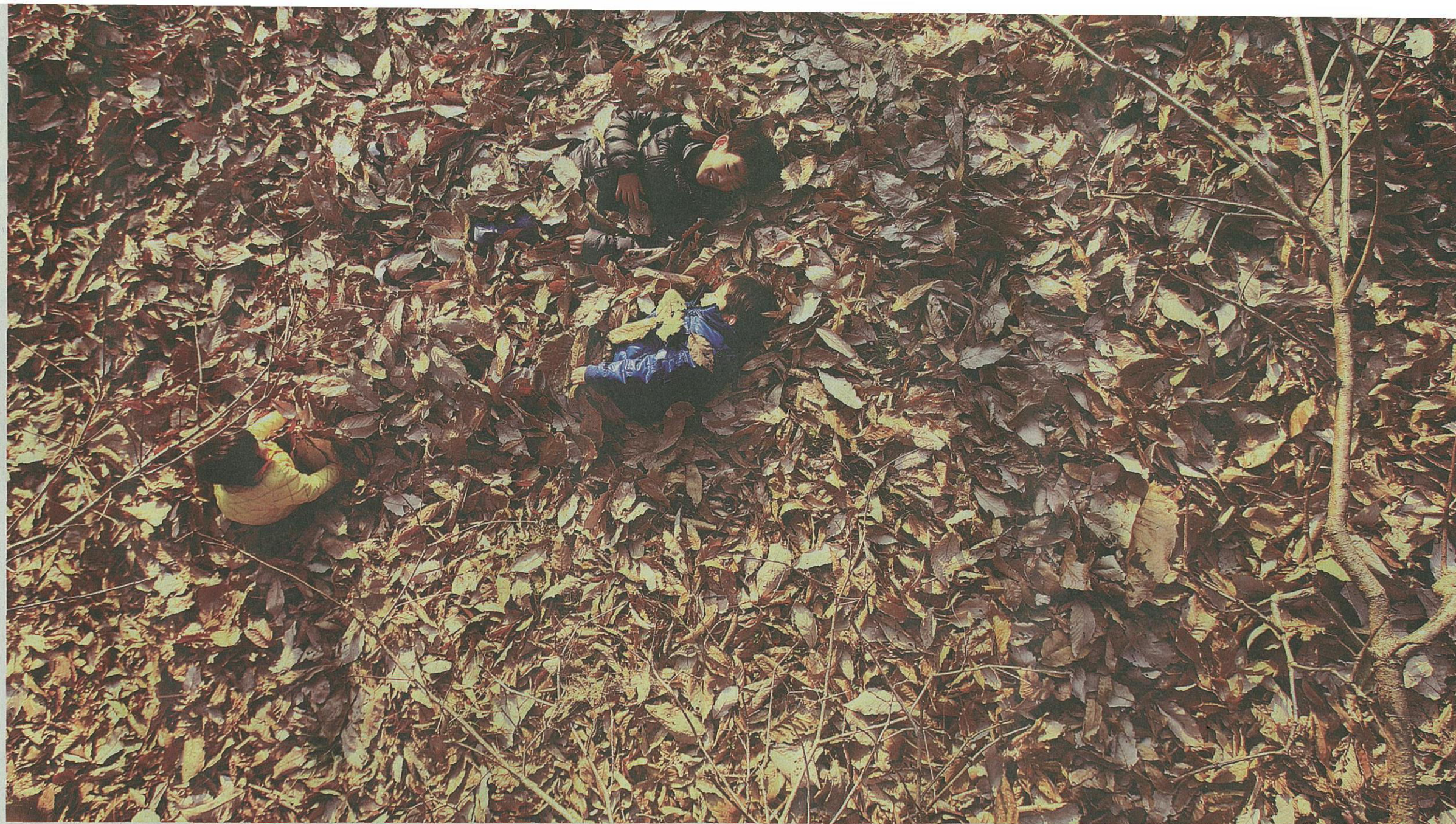
6

- あたしっち

テレビ情報
最終面から

8・9・10

- 小泉今日子さん登場



遊ぶ子どもたちを斜陽が照らす。豊かな森が守られる竜田山は、今も昔も市民の憩いの場だ(熊本市で)

*里見研撮影

父母が愛でた竜田山と金峰山

姜尚中



心の風景

漱石の名作『三四郎』で主人公が登ったという竜田山は、熊本市内のほぼ中央に位置する丘陵状の山だ。このわずかに標高150メートルほどの山からは西南に、同じく漱石の『草枕』に登場する峠の茶屋のある金峰山が望める。

私は、物心付いた頃からずっと我が家の前に寝そべっているような竜田山を仰ぎ見、そして夕日に染まる金峰山に親しんできた。我が家の喜びも、悲しみも、ふたつの山はじつと見守り続けてくれたのだ。

父も母も、こよなくふたつの山を愛した。いま、ふたつは実家の墓を見下ろし、金峰山が見える竜田山の中腹に眠っている。

墓石の表には永野家の墓の文字が刻まれ、裏には朱色で家族の民族名が彫り込まれている。父が亡くなった後、こんな墓を建てたいのか、母から相談を受けたとき、わたしは迷わず、表に日本名を、裏に韓国名を刻むように勧めた。

ドイツ留学中にハイデルベルクの大きな墓苑で見つけたユダヤ人の墓のことが思い浮かんだからだ。墓石の表には、ドイツ語で、裏をみるとヘブライ語で、亡くなった夫婦の名前が刻まれていた。そこには異郷と故郷のはざまで生きたふたりの人生が刻まれているように思えてならなかった。

意外にも母はわたしの思いつきを快く受け入れてくれた。竜田山の桜も、母の故郷である鎮海の桜も、こよなく愛でた母にとって、日本も韓国も、熊本も鎮海も、同じように故郷だったに違いない。

その母も、7年前の春、満開の桜が散り始めるのを見届けるように静かに息を引き取った。きつと竜田山の桜吹雪に見惚れながら、中腹までの山道を登っていく夢を見ていたに違いない。落地成根、落葉帰根の80年の生涯だった。母を思い出す度、竜田山の桜と夕日に映える金峰山が心に浮かんでくる。

文・姜尚中

